

今週のメニュー

■ [トピックス](#)

◇「化学週間」の東大イベントで身近なプラスチックを紹介

■ [随想](#)

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(10)

木下 清隆

■ [編集後記](#)

■ トピックス

◇「化学週間」の東大イベントで身近なプラスチックを紹介

10月18日(日)に東大・小柴ホールで「君たちの将来と化学の未来—東大で過ごす化学の週末—」が、主催；日本化学会、化学工学会、東京大学大学院理学系研究科、同工学系研究科、「夢・化学-21」委員会、共催；塩ビ工業・環境協会で開催されました。

2013年に産学4団体(日本化学工業協会、日本化学会、化学工学会、新化学技術推進協会)により、10月23日を「[化学の日](#)」、この日を含む週を「化学週間」に制定され、今年もこれを機会として化学を身近に感じていただけるようなイベントが各地で企画、開催されましたが、この東大イベントもその一つで、中学生、高校生を対象として化学の魅力について知ってもらおうという企画です。東大の藤田誠教授の講演、VECによる演示・実験、そして国際科学オリンピック出場経験者によるトークイベントという構成となっており、このトークイベントを熱心に聞いている様子からは、化学グランプリ、そして国際オリンピック出場を目指している中高生も少なからず参加されていたようです。

ちょうどこの10日ほど前にノーベル賞の発表があり、大村智さんが医学生理学賞、梶田隆章さんが物理学賞を受賞されたことが、東大大学院西原寛教授の主催者挨拶で紹介され、この企画を盛り上げることとなりました。続いて、東大大学院の藤田誠教授が「化学と幾何学～多面体の定理を活かしたものづくり～」というテーマで講演しました。比較的小さな分子が金属イオンと引き合うと自然に集まり規則性の高い構造に落ち着く「自己組織化」という現象を見出した時の感動から、この発見に基づいた概念で作りだした新規多面体についてなど新しい研究へ挑戦する魅力について話され、最後に「冒険をいとわず新しい発見に挑戦してほしい」と中高生に向けたメッセージで締めくくられました。(写真1)



写真1. 藤田誠教授の講演

VECからは、“化学のおもしろさを知ってもらえるような演示・実演コーナーを”との依頼から、出前授業やプラスチック教育連絡会で中学生や理科の先生方を対象に説明している「身近なプラスチック」を紹介する中で、1) 熱で収縮するシュリンクフィルム(写真2)、

2) 密度(比重)でプラスチックを区別(写真3)、3) ライトを光らせる導電性プラスチックの実演、さらに汎用プラスチックの燃える様子の違いをビデオで紹介するなど、できるだけ動きのある演示としました。

密度でプラスチックを区別では、飽和食塩水、水、50%エタノールの3層液からなる試験管を準備し、汎用プラスチックのポリプロピレン(PP)、ポリエチレン(HDPE)、ポリスチレン(PS)、ポリエチレンテレフタレート(PET)及び塩化ビニル(PVC)の色分けしたペレットを入れて、これらが3層に分かれる様子をプロジェクターで見えていただくようにしました。PETとPVCは一番底に沈むこととなりますが、この2つは燃える様子の違いで区別できることをビデオでも紹介しました。



写真2. シュリンクフィルムの実験



写真3. 密度でプラスチックを区別する実験

参加者には、公募で大賞となった「化学の日」2015年版の缶バッジと一家に一枚周期表の他、主催、共催団体からのたくさんの資料が配布されました。この企画で聞いたこと、配布の読み物が、化学、プラスチックの世界へ進む機会となったという方がおられることを期待し、今後もこうした次世代の若い人達に理解を深めていただく活動を続けていきたいと思えます。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(10)

木下 清隆

<前回とのつながり>

伊勢の櫛田神社の祭神は大若子命となっているが、果たしてそうかという問題があること、その真偽の鍵を握っているのは『倭姫命世記』であることを前回紹介した。今回は、その世記の検討をすることにする。

2. 倭姫命世記

まず、『倭姫命世記』とはいかなる書なのかを明らかにする必要がある。この書については未だ分かっていないことが多いが、その概要については、例えば、『神道事典』(國學院大學日本文化研究所編、弘文道 一九九九)に、

「倭姫命世記は、倭姫命の一代記と言った形を取りながら、伊勢両宮鎮座の由来を記す。また正常、正直などの神道教理が説かれている。鎌倉時代初期ないし中期の作とされる。全体として道教・五行説をはじめ種々の教説を借りながらも、佛本神迹思想が全盛の時代に、強く神道の独自性を主張した点に特徴がある」

と紹介されている。このように世記は鎌倉期の作品であるとされる一方で、その原本は更に古い時代に作成されたとの説も存在している。このような問題も含めて『倭姫命世記』について、その概要を紹介すると以下ようになる。

伊勢神宮の天照大神が天武・持統朝に国家神に格上げされるに伴い、内宮の禰宜には荒木田氏が登用され、格下げされた度会氏は外宮のみの禰宜となった。内宮の絶対的権威を高めるための朝廷の努力により、外宮の立場は逆に徐々に低下して行く。更に悪いことに外宮の創建に関する事跡は記・紀に一切記載されていない。そうした危機感から、度会氏は、天照大神、豊受大神の鎮座の経緯を述べ、自分達の正統性を主張すると共に新しい神道観を提示するようになったとみられる。

このような中から生まれたのが神道五部書と云われるものである。^{あまてらしますいせにしよこうたいじんぐうごちんざしだい}『天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記』^き『伊勢二所皇太神御鎮座伝記』^き『豊受皇太神御鎮座本記』^き『造伊勢二所太神宮宝基本記』^{ほうき}『倭姫命世記』の五部の書である。これらの書がいつ頃書かれたものかは明らかではないが、現在では鎌倉時代の初・中期とされている。伊勢神宮ではこの五部書を極秘の神書として取り扱い、祠官と云えども六十歳未満ではこれを見ることが出来なかったらしい。また、「禁河の書」と称して、伊勢宮川の外に出すことを禁じたとされている。



伊勢 宮川（度会橋）
（伊勢神宮西方を流れ伊勢湾に注ぐ）

ところが江戸時代に入って、五部書中の『倭姫命世記』が突然のように世に現れ、いろいろな批判に晒され、遂には偽書とまで言われるようになる。^{みかんなぎきよなお}御巫清直の著書『太神宮本記 帰正抄』（『神宮神事考証 前編』西濃印刷、一九三五）の「解題」に、江戸期における世記評価の変遷が要約されているが、これを中心に当時の状況を整理すると次ぎのようになろう。

偽書説の口火を切ったのは国学の開祖といわれる契沖である。更に、江戸初期の天文暦学者の渋川春海が、「……仏語甚だ多し、習合の書なり」と断ずるようになる。これらの世記批判の流れを汲む江戸中期の神道家、^{よしみよしかず}吉見幸和が『倭姫命世記』を含めた神道五部書を徹底的に批判した。この書を『神道五部書説弁』という。この中で彼は「…後世、外宮の徒、奸曲者の偽作する所にして…」と云った表現をしており、初めから外宮の神官を全く信用していないことがわかる。更に「日本紀と、儀式帳の外は野史雑説にして取るに足らず…」とも述べており、彼の論理の基盤が日本書紀と荒木田氏が作成した皇太神宮儀式帳にあることがわかる。このような彼の偏見と論理基盤、即ち、江戸時代になって復活してきた伊勢神宮と、その論理的な裏付けとなっている日本書紀を絶対視する立場からすれば、五部書全てが論ずるに足らざる偽書であるとの結論に達するのは当然のこととなる。

このような吉見の全面否定に対し、本居宣長、平田篤胤、伴信友等は、『倭姫命世記』は、後世いろいろと加筆されてはいるが、其の元となる文は甚だ古いものと見られるとして、世記の文献的価値を評価している。具体的な例を挙げると、倭姫命が菟田の筱幡へ向ったとき、一人の少女に行き逢う場面がある。「時に佐佐波多^とが門に、童女参り相へり」と書かれているが、ここで出てくる「門」について、古代文学者の和田嘉寿男氏は『倭姫命世記 注釈』（和泉書院、二〇〇〇）のなかで、

「〔門〕は、兩岸迫り狭くなった地形の称で、この場合は、佐佐波多の地への入り口である。…… 佐佐波多の地で童女と遭遇した場所を〔門〕とするなど、筆者の古代への知識は高度であり、文体も古体を模して滑らかである。……」(四十六、四十九p)

と述べ、「門」の使い方が甚だ古いものであることを述べている。なお、和田氏は世記が鎌倉期の著作とする立場から、筆者の古代への知識は高度、文体も古体を模して滑らか、と評している。



倭姫宮 (神宮徴古館側鳥居)



倭姫宮 拝殿

このような『倭姫命世記』の後世加筆説に基づき、これを徹底的に研究したのが御巫清直^{みかんなぎきよなお}である。彼は『太神宮本記帰正抄』の中で、神宮の史籍数百在る中の最極の旧典は『太神宮本記』であるとした。この本記は上下二巻で構成されていたらしいが、天平神護二年(七六六)に焼失したとされている。そのことを清直は『太神宮諸雑事記』及び『太神宮参詣記』を引いて論証している。

『倭姫命世記』は『太神宮本記』下巻の逸文を基に作成されたとされているが、その成立について清直は「…後人其の逸文を取りて、日本書紀、延喜式、古語拾遺及び儒仏の書等を混合し、終に一部に編纂して、倭姫命世記と号す。…」と述べている。更に、このような形の『倭姫命世記』は、其の跋に大治四年(一一二九)に之を書写すとあるところから見れば、同年以前に偽作されたことは間違いないと断じている。

要するに、『倭姫命世記』のオリジナルは天平神護二年(七六六)に焼失した『太神宮本記』であるが、その後、

大治四年(一一二九)までの間にその逸文に加筆されて、現在の形になったというのが御巫清直^{みかんなぎきよなお}の見解である。更に加筆されたものはオリジナルの再現ではないという意味で彼は偽作と呼んでいる。

このような認識の下に、彼は『倭姫命世記』の文章を丹念に調べ上げ、注釈し、古来の文と後世に付加された文とを分別した。そしてこの古来の文こそ本来の太神宮本記の内容であったに違いないとした。彼の著書の帰正抄なるタイトルは、正しい本記に帰すという意味である。この研究のために彼は約四十年の歳月を費やし、元治元年(一八六四)に『太神宮本記帰正抄』を完成させた。

世記は概略、以上のような変遷を辿った書であるが、御巫清直の主張を入れて整理すれば、次のようなことが結論として言えよう。

- ① 『太神宮本記』が書かれたのは、天平神護二年(七六六)以前、天照大神が国家神に昇格した天武・持統朝以降と考えられるが、太神宮なる語が使われ始めたのは、大宝二年(七〇二)からであり、従ってこれ以降ということになる。更に内容的には『倭姫命世記』が明らかに『日本書紀』を下敷きにしており、これから類推すれば『太神宮本記』も『日本書紀』を下敷きにしていただ可能性がある。そうであれば『太神宮本記』の作成時期は養老四年(七二〇)以降、天平神護二年(七六六)以前、と云うことになる。

- ② 『倭姫命世記』が『太神宮本記』の逸文を主体にして構成されているものとするなら、撰述されたのが鎌倉時代であったとしても、その内容は八世紀初頭にまで遡れることになる。従って、世記の内容としては、その当時の史実或いは伝承等が記載されている可能性が高いことになる。

なお、『太神宮本記』の撰述者は誰なのかについては、御巫清直も不明としているが、以上のような推定作成時期と内容から見て、度会氏が深く関わっていたものと考えられよう。
(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

片付けをしたら、もう読み返しそうにない本が出てきました。資源ごみにするのも忍びないので、買取・販売のお店に持って行ってみることにしました。初めてだったので『こんな少し』と思われはしないか心配でしたが、受付は機械的で番号札を渡され少し待つように言われました。店内を見ていると様々な本があり、以前から気になっていた本も半額ほどになっていました。思っていたよりも本はきれいでした。

買取価格は、文庫・新書はある程度一律に決まっているようでした。ハードカバーは査定されましたが、1500円以上の本が5円になっていたものがあったので、若干悲しかったです。合計で305円になり、気になっていた本を310円ですべて買ったので、手持ちの本10冊と新しい本1冊を交換したような形になり、まあ、悪くないかなと思った次第です。(漠)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp